

●楠木しげお（詩人）

- ①「うれしいひな祭り」サトウハチロー
  - ②小学二年
  - ③ 詩を書きつづけて、四十余年になります。ただし、私の場合は、童謡の作詩が主体です。
- 子どものころ、ラジオからよく童謡が流れていました。気に入った歌がたくさんありましたが、びかいちだったのが、「うれしいひな祭り」（サトウハチロー作詩、河村光陽作曲）です。このきらびやかな、上品でわくわくする童謡。歌詞をたどりながら、雛飾りの前で胸をときめかせている、変な男の子なのでした。雛祭りの歌はいくつかありますが、足元にも及びません。
- この歌をいつ頃知ったのか、定かではありませんが、小学二年生ぐらいとおきましよう。
- 舟木一夫の「高校三年生」が流れるころ東京に出てきて、どうした縁か、「うれしいひな祭り」のサトウハチロー先生の許で、童謡の勉強をすることになったのでした。

●香山美子（詩人）

- ①「赤い靴」野口雨情
  - ②五・六歳のころ
  - ③ 五・六歳のころ、母の病氣静養のため横浜の間門というところに転地した。少し歩いて石段をおりと浜で、左右の崖の沖を気船がゆくのがみえた。
- 住いの隣には、ティミニエンコさんという老外人夫婦がしずかに暮らしていた。「赤い靴」にはそのころ出合った。このうたをきくと、私はたまらない不安にとられ、
- 「ほら、泣くよ泣くよ」  
からかわれるよりも先に泣いていた。  
「赤い靴」を私ほうたったことはないけれど、けしてきらいではなかった。
- 世の中にはなにかわからない悲しいことがある。これから出合うものへの不安、あこがれ、期待。
- 小学校へあがるころ、花電車をみた。ひどく感動して色えんぴつで電車をかきついでにことばをつけてうたった。  
“ちんちん電車、花電車……”  
「赤い靴」に出合ってよい時をすこしたと思う。

●小林陽子（作家）

- ①「のちのおもひに」立原道造
  - ②高校一年
  - ③ この詩との出会いは、国語の教科書。夢はいつもかへって行った 山の麓のさびしい村に”
- まず出だしの一行に引きつけられた。音楽のような詩の旋律、イメージ豊かな言葉。なんでも口ずさみ、いつでも空で口をつけて出てくるようになった。
- 国語の教師はクラスの担任で、若く、いつも口角に泡をためて熱っぽく語り、人気があった。五十人あまりのクラスで女子は六人、横一列だけ。そのせいかわがよく、回覧ノートを作ったりした。先生のこと、男子のこと、将来のこと、好きな言葉や詩などを書いた。「口角に泡」の先生は、ぎこちない男子女子の間をとりもつ役を買って出て、有志十人ばかりをハイキングに連れ出したり、新婚の自宅に招いたりしてくれた。
- 大学時代になると、夏、冬とたびたび信州に行った。信州のイメージと結びついたこの詩は、文学に夢中になっていったあのころの扉をひらくカギとなった。